

マルクスとエコロジイ

グローバル資本主義の時代における気候正義と階級闘争

大阪市立大学経済学研究所 准教授

斎藤 幸平

長年にわたって、環境運動に関わる人だけでなく、マルクス主義を自称する人々でさえも、マルクスが近代主義的で、生産力至上主義的な思想家であるという批判に同意してきた。このいわゆる「プロメテウス主義」的解釈によれば、マルクスは自然には限界が存在するという事実を無視し、自然の絶対的支配を実現しようとしていたとされる。資本主義のもとの技術発展が自然を自由に操ることを可能にし、それが人間の解放の物質的基盤を用意するという、素朴な生産力上昇にたいする称賛にマルクスが陥ってしまったというわけだ。だから、彼らの結論は、当然のことながら、「マルクスのエコロジイ」はまったく存在しようがないことになる。

ところが、このような極端な解釈は、現代の環境危機の深刻化の前に影響力をむしろ弱めている。気候崩壊 (climate breakdown) に代表される環境危機は資本主義という社会

システムのもとの大量生産・大量消費から切り離せないということがますます明らかになってくるなかで、マルクスのエコロジカルな資本主義批判、ならびにエコ社会主義 (ecosocialism) の構想が再発見され、再評価されるようになっていくのだ。例えば、ジョン・ベラミー・フォスター、ポール・バークETT、ジェームズ・オコンナー、ジョエル・コヴェル、ミシェル・レヴィといった (英米圏の) マルクス主義者たちは、マルクスのアプローチが、自然環境の分析のみならず、資本主義に代わる持続可能な社会を構想するのに役立つことを示し、「マルクスのエコロジイ」の復権を唱えるようになっていくのである (1)。

1. マルクスのエコロジイの再発見

とはいえ、すでに述べたように、依然としてマルクスのエコロジイを分析するために役立つ知見が様々な形で含まれており、マルクスのエコロジイを再構成するために必須の一次資料である。ところが、不運なことに、マルクスの死後、これらの抜粋ノートに対して関心をもつ人は皆無に等しく、研究する価値のない単なる抜き書きとしてアーカイブのなかで完全に忘れられることになったのだ (2)。

とはいえ、なぜこれらのノートは完全に無視されてしまったのだろうか？ 事実、これらのノートは最近まで刊行されることすらなかったのである。実は、ここには、ソ連型マルクス主義とその批判者の論争という政治的情勢が関与している。

まず、研究ノートの忘却に寄与した一つの解釈は、いわゆる「伝統的マルクス主義」によるものである。伝統的マルク

コロジイは存在しないと考えるマルクス主義者は少なくない。例えば、テッド・ベントンによるマルクスが「自然的限界を認めることから目を背けた」という批判は有名であり、現在でも一定の影響力を示している。また、今日でも、スヴェン・エリック・リードマンは、マルクス生誕二〇〇年を記念して刊行された伝記のなかで、「マルクスを環境のために戦う闘士として描くことの危険性、あるいは少なくとも現代的な意味で環境問題に意識的であった人物として描くことの危険性」を指摘し、「そのような事実はなかった」のだと、否定的な見解を述べている (3)。

こうした解釈が影響力を持って、なかなか訂正されない理由の一つは、マルクス自身が『資本論』を完成させることができなかったという事実に関係している。実際、マルクスはとりわけ晩年に、エコロジカルな問題意識をもって、農芸化学、鉱物学、植物学などの自然科学をかなり熱心に研究していた。ところが、そのような研究の大部分は、『資本論』第一巻の刊行後に行われたため、マルクスは『資本論』第二部、第三部の叙述のうちに、環境問題についての新しい知見を取り込んで、体系的な形で展開することができなかったのだから。その代わりに、勉強の過程で作成された数多くの抜粋ノートが残されただけになってしまった。もちろん、これらのノートには、資本主義的生産のもとの人間と自然の物質代謝の

(1) ここで「再発見」というのは、九〇年代に入ってから、フォスターらがマルクスのエコロジイを論じる以前にも、日本でいえば、都留重人や宮本憲一がマルクス主義的アプローチをもとにして、環境問題を論じていたし、海外でもバリー・コモナーが物質代謝論を展開していたからである。

(2) Ted Benton, "Marxism and Natural Limits: An Ecological Critique and Reconstruction" in *New Left Review* 1/78 (November/December 1989): 51-86. Sven-Eric Liedman, *A World to Win* (London: Verso, 2018), p. 480.

主義は、マルクスとエンゲルスの史的唯物論が、人類史と自然の万物を包括し、宇宙のすべてを説明する閉じた弁証法的体系として扱ってきた。ところが、マルクス主義者たちがマルクスの思想の完結性を強調すればするほど、マルクスの経済学草稿に注意を十分に払うことは難しくなっていたし、ましてや抜粋ノートに対して着目することはなかった。というのも、それらに着目して、新しい知見があることを指摘することは、マルクスの『資本論』が未完であることを認めることになってしまふからである。実際、「マルクス主義」を打ち立てようとしたエンゲルスでさえも、晩年のマルクスの自然科学への熱心な取り組みについて——知っていたにもかかわらず——言及することはなかった。そのため、二〇世紀の伝統的マルクス主義者たちは、マルクスが自然についてほとんど言及することはなかった事実を認めたとしても、エンゲルスの『自然弁証法』や『反デューリング』によって、唯物論が宇宙全体へ拡張されていると単純に想定してきたのである⁽³⁾。

(3) 「伝統的マルクス主義」とその「世界観」については、ミヒヤエル・ハイリツヒ『資本論』の新しい読み方』堀之内出版、二〇一四年を参照。

(4) 「西欧マルクス主義」については、ペリー・アンダーソン『西欧マルクス主義』新評論、一九七九年を参照。

マルクス主義の経済決定論と機械論的実証主義の元凶とされたのだ。こうして、西欧マルクス主義はエンゲルスと彼の自然弁証法をマルクス主義から放逐したが、その代償は大きい。つまり、みずからの分析から自然と自然科学の領域を完全に排除することになったのである。その結果、マルクスの自然科学への熱心な取り組みは、二〇世紀のあいだ伝統的マルクス主義と西欧マルクス主義のどちらによっても無視されることになってしまったのである。

だが、こうした状況は、新『マルクス・エンゲルス全集(MEGA)』によって、マルクスのノートが刊行されるようになることで急速に変わり始めている。マルクスが『資本論』を完成させようと努力するなかで、なぜ自然科学をこれほど熱心に研究しなくてはならなかったかを分析し、その理論的狙いを再構成することができるようになったからである。その結果、すでに、二〇世紀末にフォスターやバーケットといったエコ社会主義者たちによって着手されていたマルクスによるエコロジカルな資本主義批判の再構成は、いまや、確固たる文献学的な証拠を獲得するようになっていく⁽⁵⁾。そして、リードマンの主張とは反対に、マルクスが晩年に取り組もうとしていたのは、資本主義のもとの環境破壊についてのより具体的な記述を『資本論』に加えることだったのであり、その限りで、彼が「環境問題に意識的な人物」であったこと

もちろん、こうした伝統的マルクス主義によって展開された万物を説明する理論としての「世界観マルクス主義」(『Tauschungsmarxismus』)を拒否したマルクス主義者たちも数多く存在する。メルロ＝ポンティが用いた「西欧マルクス主義」という呼び名のもとで知られているマルクス主義者たちがその代表例である⁽⁶⁾。ところが、ルカーチに端を発する西欧マルクス主義が伝統的マルクス主義を退けた際、彼らはエンゲルスを問題含みの世界観を打ち立てた責任者として非難し、マルクスの経済学批判を救おうとしたのである。

「このように方法を歴史的・社会的な現実限定することは、きわめて重要なことである。エンゲルスの弁証法にかんする叙述から生じてくるさまざまな誤解は、本質的には、エンゲルスが——ヘーゲルの誤った例にしたがって——弁証法的方法を自然の認識にも拡大しているということに根ざしている。弁証法の決定的に重要な諸規定、すなわち主体と客体との相互作用、理論と実践との統一、思考におけるカテゴリーの変化の基礎としてのその土台の歴史的な変化、等々の諸規定は、自然認識のなかには存在しない。」⁽⁵⁾

つまり、エンゲルスが誤ってマルクスの社会分析としての弁証法的方法を、自然の領域にまで拡大したことが、ソ連型が明らかになってきているのだ。

ここでのポイントには、マルクスが気候変動や海洋酸性化のような現代の環境問題についてあらゆる出来事を当時すでに予測していたということではない。そのような極端な主張は、伝統的マルクス主義の過ちを繰り返すことになってしまいうだろう。むしろ重要なのは、マルクスが当時の文献を読んで、エコロジカルな批判を経済学批判のなかに取り込もうとしていたという事実である。かつてアラン・リビエツは、マルクスの経済学が環境問題を無視していると批判し、次のように挑発的に述べた。「マルクス主義的パラダイムの一般的構造と知的骨組みは、それが提唱する中心的な解決策もろとも捨て去られなくてはならない。マルクス主義思想のほとんどすべての領域が、それが本当に使えるものになるためには、

(5) Georg Lukács, *Geschichte und Klassenbewusstsein. Studien über marxistische Dialektik* (Neuwied: Luchterhand, 1970), p. 63.

(6) Paul Burkett, *Marx and Nature: A Red and Green Perspective* (New York: Palgrave, 1999); John Bellamy Foster, *Marx's Ecology: Materialism and Nature* (New York: Monthly Review Press, 2000); 斎藤幸平『大洪水の前に』マルクスと感星の物質代謝』堀之内出版、二〇一九年を参照。また今年刊行されたMEGA第四部門第一八巻の「編集者序文」も参照されたい。

徹底的に再検討されなくてはならない。」(2)ところが、MEGAの刊行によって、リビエツツの主張とは反対に、マルクスの方法論を正確に再構成することによって、二一世紀のエコロジカルな資本主義批判を進展させることができる可能性が拓けてきている。つまり、外部から概念や方法をマルクスの経済学批判に持ち込んで、さまざまな修正を強引に加える必要はない。マルクスの議論をベースにしたほうがむしろ効率的に、資本主義と環境破壊の関係を扱うことができるというのが、明らかにされるようになっていくのだ。その際に鍵となる概念が「物質代謝の亀裂」(Metabolic rift)である。

II. 物質代謝の亀裂

マルクスは資本の破壊的な力をはつきりと認めており、人間と自然の物質代謝に生じる亀裂が、自由で、持続可能な人間の発展のための物質的条件を不可避に切り崩していくことを批判していた。これが、「エコ社会主義」にとつての根源的な洞察である。

ここで重要なのは、マルクスによれば、資本主義における生産力の発展に内的掠奪的性格は、未来の社会にむけた物質的条件を準備するような進歩をもたらさないとはいえない。

という問題を、ドイツの化学者であるユストウス・フォン・リービッチが近代農業を「掠奪農業」(Raubbau)として批判したことに着想を得て、『資本論』のなかで展開している。リービッチは『農芸化学』第七版において、土壤から養分を取れるだけとつて収穫を最大化しながら、取り去った養分を土壤に充足しない資本主義的農業経営の不合理性を厳しく非難した。掠奪農業は短期間での利潤を最大化する必要性によって駆り立てられているが、それは持続可能な生産のために必要な土壤の素材的な特性とは相容れない。そのため、資本の価値増殖の論理と自然の普遍的物質の論理という二つの論理の間に大きな乖離が生じ、それが人間の環境との相互作用における「物質代謝の亀裂」を生む。この場合、亀裂は土壤疲弊という形で顕在化するようになる。

この点について、『資本論』の有名な箇所でもマルクスは次のように述べている。

「資本主義的生産様式は、それが大中心地に集積させる都市人口がますます優勢になるに従って、一方では、社会の歴史的原動力を蓄積するが、他方では、人間と土地とのあいだの物質代謝を、すなわち、人間により食料および衣料の形態で消費された土地成分の土地への回帰を、したがって持続的な土地肥沃度の永久的自然条件を攪乱する。こうして資本主

とだ。むしろ、マルクスが分析したのは、資本が短期間で最大限に利潤を上げようとする狙いが、自然本来の循環から乖離していくようになり、最終的には、人間と自然の物質代謝において様々な軋轢を生み出すかようになっていく過程であった。

労働を媒介とした人間と自然の物質代謝はどのような社会においても共通の歴史貫通的な再生産の条件であり、地球上で人間が生きていく限り、途絶えることのない物質循環のプロセスである。ところが、この労働が社会的に異なった形で編成されることによって、人間と自然の物質代謝も大きな変容を被ることになる。つまり、資本主義社会においては、労働が価値の源泉となるために、資本が抽象的人間的労働を一義的なものとして編成するようになっていく。それと同時に、物質代謝の過程におけるその他の素材的要素が資本の論理に従属させられるようになる。価値の論理を媒介とした一面的な物質代謝過程の再編成・再組織化によって、物質代謝に大きな亀裂が生じるのである。

よく知られているように、マルクスはこの物質代謝の攪乱

(~) Alain Lipietz, "Political Ecology and the Future of Marxism", *Capital Nature Socialism* 11 (2000), p. 75.

義的生産様式は、都市労働者の肉体的健康と農村労働者の精神生活とを、同時に破壊する。」(MEGA II/6: 476)

このように、マルクスは『資本論』で、物質代謝の亀裂をとりわけ土壤疲弊との関連で論じていた。だが、マルクス自身はこの問題を農業に限定するつもりはなく、石炭の枯渇、森林伐採、酪農などの関連でも物質代謝の亀裂の問題を扱おうとして、様々な文献を検討していた。その取り組みが記録されているのが、抜粋ノートなのである。それゆえ、マルクスは自らの手法が現代の環境危機を分析するための枠組みとして応用されている事実を知つたら、きっと大いに喜んでいただけない。例えば、ステファノ・B・ロンゴによる漁業資源の問題、ライアン・ギンダーソンによる酪農ビジネスの批判、フィリップ・マンクスによる窒素循環の攪乱などの分析は、マルクスの物質代謝の亀裂論が農業の問題に限定されるわけではなく、現代のエコ社会主義者たちにとっての導きの意図になっていることを示している(8)。

さらに、こうした近年のエコ社会主義者たちの批判に触発される形で、マルクス主義者ではないが、世界的に著名な左派ジャーナリストであるナオミ・クラインも次のように述べるようになっていく。

「ソ連やヴェネズエラが深刻な環境破壊を引き起こしたという」事実を認めよう。他方で、強固な民主主義的社会主义の伝統をもつ国々——デンマーク、スウェーデン、ウルグアイ——が、世界でもっとも先見の明がある環境政策を採用していることも指摘しておく必要がある。以上のことから結論できるのは、社会主義は必ずしもエコロジカルではないものの、新しい形態の民主主義的エコ社会主義——それは将来世代への義務やあらゆる生命のつながり合いについての先住民の教えから学ぼうとする謙虚な姿勢をともなっていないなくてはならない——が、人類の集団的生存にとっての最良の企てである。

(8) Stefano B. Longo et al. *The Tragedy of the Commodity: Oceans, Fisheries and Aquaculture* (Brunswick: Rutgers University Press, 2015); Ryan Gunderson, "The Metabolic Rifts of Livestock Agribusiness", *Organisation and Environment*, Vol. 24, Issue 4, December 2011, pp404-422; Philip Mancus, "Nitrogen Fertilizer Dependency and Its Contradictions: A Theoretical Exploration of Social-Ecological Metabolism", *Rural Sociology*, Vol. 72, Issue 2, October 2009, pp269-288.

(9) Naomi Klein, "Capitalism Killed Our Climate Momentum, Not Human Nature" *The Intercept*. <https://theintercept.com/2018/08/03/climate-change-new-york-times-magazine/> (last access on 2019. 8. 23)

マルクスは確信していた。実際、気候変動の危機に取り組むための残された時間はわずかである以上——二〇三〇年までに二酸化炭素の排出量を半減させ、二〇五〇年までに純排出量をゼロにしないといけない——、排出権取引やその他の市場メカニズムを用いて、気候変動を解決できるというリベラルの主張は、目前の危機の深刻さや脅威から目を逸らすためのイデオロギーとして機能していると言つてよい。

メルケルやオバマ、ビル・ゲイツのような政治家やエリートは気候変動の問題を問題視しているという外見の言動や、国連を中心とした国際機関が気候変動への必要な取り組みを行うに違いないというリベラルの信念は、トランプのような気候変動の重要性を否定する政治家と同程度か、それ以上に問題含みである。実際、そのような解決策に期待をかけて、人々が行動を起こさなくなることで、この三〇年間に有効な取り組みなしに浪費されてしまったからである。

既存の生産様式を変革するための意識的な試みなしに、市場が問題を解決してくれるという考えは結局のところ、「神話」にすぎない。そもそも、市場に任せていては、時間が過ぎるために、グリーン資本主義が機能するようになるころには、気候変動を元の状態に回復することはできないところまで進んでしまっているだろう。市場に任せていては遅すぎるのだ。

あるように思われるということだ。」(9)

クラインは『これがすべてを変える』のなかでも、「物質代謝の亀裂」に肯定的に言及しながら、議論を展開していた。それゆえ、彼女の掲げる「グリーンニューディール」も、資本主義復興のプロジェクトではなく、資本主義社会をエコ社会主義へ転換するための戦略として解釈しなくてはならない。しかも、それがサンライズムーブメントなどの草の根の環境運動と結びついて、バーニー・サンダースやアレクサンドリア・オカシオ・コルテスといったアメリカの国会議員にも影響を与えるようになっていたのである。このように、マルクスの物質代謝の亀裂という発想は、小さなマルクス主義者内の環境にかかわる議論という枠組みを超えて、理論的にも、実践的にも普及しているのだ。

III. 帝國的な生活様式を超えたエコ社会主義

マルクスは、資本主義システムが続く限りで、生産一般の物質的条件が悪化していくことを不可避な傾向であると考えていた。別の言い方をすれば、グリーン資本主義が近い将来に実現可能であるというリベラルの信仰とは反対に、市場は持続可能な生産を実現するための効率的な制度にならないと、

また、リベラルが期待する資本主義のもとでのイノベーションも、環境危機を解決するためには不十分である。資本主義的テクノロジは「亀裂」(rift)の問題をどこか別のところへ「移転」(shift)するための方法を開発するにすぎないからである(10)。歴史が示すように、マルクスの時代から科学者たちは様々な問題の深刻さに対して警鐘を鳴らしてきたが、資本主義は問題の根本解決を避けるための時間稼ぎを繰り返し、それによって危機を深刻化させてきた。そして、人々がラディカルな変革を求めない限り、これからも同じことを、より大きな規模でやり続けるだろう。

そもそも価格と自然的条件のあいだにフィードバックメカニズムが存在しない以上、この惑星の大部分が人間の文明的生活に適さないような状態になったとしても、資本蓄積がなんらかの形で可能であるならば、そのこと自体が資本主義に終止符を打つことはないし、地球からの掠奪にブレーキをかけることもない。だからこそ、マルクスは生産力の発展を無批判的に賞賛したのではなく、「資本の生産力」として組織される技術的発展が、将来社会のための物質的基礎を提供せ

(10) Brett Clark and Richard York "Rifts and Shifts: Getting to the Root of Environmental Crise" in *Monthly Review* 60, no. 6 (2008): 13-24.

ず、それを掘り崩す結果になることを警告していたのである。

この問題は、現代資本主義が環境破壊からも利潤を獲得することができるという事実のうちにはつきりと見て取ることができるだろう。ナオミ・クラインが新自由主義の「惨事便乗型資本主義」として分析した事態が、気候変動の深刻化とともに世界規模で新たに展開される可能性があるのである(11)。例えば、資本主義は気候変動のうちに、気候工学、早魃に強い遺伝子組み換え作物や化学肥料、森林火災保険、防波堤建設などの形で新しいビジネスチャンスを見つけ出すだろう。それゆえ、環境危機にあらわれる自然的限界は資本蓄積にとつての経済危機につながるわけではない。資本主義はそれらの限界を超えて資本蓄積を継続することができるのだ。他方で、現在の水準での文明的な生活は、資本が特定の自然的限界を超えてしまうと維持することができなくなってしまう。だからこそ、環境危機を経済危機へと解消してはならず、環境危機を自由で、持続可能な人間の発展に対する危機として捉えなくてはならない。

マルクスは、イングランドによる植民地支配から生じたアイルランドの土地疲弊の例を参照しながら、資本主義の世界的拡張が、周縁における環境危機の深刻化と直接的に結びついていることを示している。そして、『資本論』第三部に於いて、「亀裂」という表現を用いながら、次のように述べた

むことになるだろう。ここでの矛盾は、貧困層は二酸化炭素の排出量が先進国の富裕層と比較してかなり少ないのにもかかわらず、気候変動の影響をより直接的な形で受けるということである。彼らには、適応に必要な技術も資本も欠けているからだ(13)。

先進国の富裕層による「帝国的生活様式」は、みずからの掠奪に依拠した快適な生活が生み出す否定的帰結をグローバルサウスや将来の世代に転嫁することによって、問題そのものを見えなくしてしまう(14)。

だからこそ、気候正義 (climate justice) を求める運動は、階級闘争の要素をはつきりと内包せざるを得ないのであり、環境プロレタリアートこそが、自らの健康、コミュニティ、自然環境を、悪化する環境危機と経済危機から守るために革命的主体として立ち上がらなくてはならない。そして、気候変動への取り組みはグローバルな規模での資本主義に対する闘争を展開する必要がある。そうしなければ、「環境帝国主

のだった。「こうして大土地所有は、社会的な物質代謝と自然的な、土地の自然諸法則に規定された物質代謝の連関のなかに修復不可能な亀裂を生じさせる諸条件を生み出すのである」、その結果、地力が浪費され、この浪費は商業を通じて自国の国境を越えて遠くまで広められる(リービッチ)。(Marx A I/4.2: 752 f.) 資本蓄積の拡張とともに、物質代謝の攪乱も世界規模の問題となっていく。

現在気候変動のもとで起きている事態は、この構図がそのまま当てはまる。気候変動もまた資本の専制に終止符を打つことはない。資本は蓄積を続けるだろうが、環境危機は深刻化し、膨大な数の環境難民が世界的に生み出されることになる。そして、単に労働条件だけでなく、生存条件一般が資本蓄積によって非常に悪化させられる「環境プロレタリアート」が形成されることになる(15)。もちろん、富裕層はなんらかの形で今と同じような生活を享受し続けることができるかもしれない。それに対して、とりわけグローバルサウスの貧困層は気候変動によって生じる自然災害の影響により一層苦し

(11) ナオミ・クライン『ショックドクトリン』(上・下) 岩波書店 二〇一一年。

(12) John Bellamy Foster, "The Long Ecological Revolution" in Monthly Review 69, no. 6: 1-16.

義」と結びついた形で、先進国のみが、気候変動に適應する一方で、矛盾はグローバルサウスに移転され、押し付けられるというこれまでの構図が拡大的に再生産されるだけになってしまうのだろう。

これまでの科学的予測を上回るスピードで進行している気候変動は私たちの生活のすべてを変えてしまう可能性が高いが、気候変動の末路を変えることは、資本主義そのものを変えることを意味している。自然からの疎外を克服することが、いまや、労働運動と環境運動の両者にとつての共通の中心的課題になっているのであり、それはグリーン資本主義ではなく、資本主義の彼岸においてのみ実現されるものである。だからこそ、エコ社会主義の構想は、環境危機と物質代謝の亀裂を資本主義の中心的矛盾として捉え、新しい持続可能な社会を作り出すための機会とみなす。この文脈において、マルクスの物質代謝の亀裂と帝国的生活様式に対する批判は、現在の環境危機の分析のための方法的基礎を提供してくれている。たしかに、『資本論』は未完のままに終わってしまった。だからこそ、ラディカルな資本主義批判として、経済学と自然科学を統合した分析を展開することによって、二一世紀のためにマルクスのエコ社会主義をアップデートし、より精緻な形で具現化していくことが、私たちに課されている理論的課題なのである。(さいとう こうへい)

(13) この不平等の問題は将来の世代が自分たちの排出していない二酸化炭素によって気候変動の影響を被るのと同じ構造である。

(14) Ulrich Brand and Markus Wissen, *Imperial Leverage: Zur Ausbeutung von Mensch und Natur in Zeiten des globalen Kapitalismus* (Munich: Oekonim, 2017)